

## 別紙 2

### 審査の結果の要旨

論文題目 社会問題と帝国問題から民衆の政治的主体化まで  
—幸徳秋水と浮田和民、吉野作造、大杉栄、山川均

論文提出者氏名 詹 亜訓

本論文は日本の明治末から大正期を対象として、ひとつには帝国主義およびそれと対抗する対外的な思想潮流、もうひとつには立憲主義や社会主義といった内的な政治体制をめぐる思想潮流を明らかにするとともに、たとえば「内に立憲主義、外に帝国主義」というような国内と対外関係の結合がどのように構想され、またどのように変貌していったのかを明らかにする研究である。そして当時の日本での産業革命の進展とそれに伴う労働者階級の形成を背景として、従来の政治にない新しい要素としての「社会的なもの」の発見を跡付け、一方で民衆の政治的主体としての成長、他方で新たな規律権力や民衆の帝國的秩序への取り込みの両面を解明することを目指すものである。

第1章の序章では、本研究の学史的背景、方法等が詳細に論じられる。社会問題と帝国問題の連関という本論文の中心的な主題について、帝国主義概念とりわけ H.U.ヴェーラーやエレイらの「社会帝国主義論」のように、社会の内的矛盾とりわけ労働問題を対外進出で解決しようとし、また台頭する社会主義に対する防壁とする帝国主義解釈に言及される。さらに M.フーコーの統治性論や生権力論に着想を得た、ドンズロらの「社会的なものの発見」の議論や、ドゥルーズに影響を受けた脱領土化/再領土化の枠組に、「非領土化」の概念を追加したものを本論文では用いている。さらに(非)領土化と主体化の関係、また当時流行した進化論の多様な影響関係についても触れている。

より日本の文脈に即しては、丸山眞男の系譜にある戦後政治学による大正期思想の諸研究(松沢、飯田、堀尾)や民衆運動史における研究(鹿野)が紹介され、現代思想の影響を受けたより新しい世代の研究(芹沢)とが対比されている。前者においては大正期の「社会の発見」は国家に対する社会の自律性と新しい政治の可能性を示すものだったが、対照的に後者においては社会に対する規律権力や統治性の拡大として把握されることが指摘されている。

第2章から本論に入り、この章では明治末の幸徳秋水と浮田和民の帝国主義や社会主義に関する議論が対照される。幸徳は日清戦争期には日本の戦争に肯定的であったが、日露戦争においては帝国主義に反対して『二十世紀の怪物、帝国主義』を出版する。ここには幸徳の社会問題への認識の深まりがあった。幸徳は『帝国主義』においてマルクス主義の発想を

導入しているが、しばしばその理解の不十分さが批判されてきた。それに対して本論文では、『帝国主義』に見られる知的源泉の多様性が積極的に評価されている。幸徳によれば帝国主義とは愛国心と軍国主義とを縦横の糸として織り上げられており、かつ資本家的制度によって今日の帝国主義はパーソナルな侵略ではなく、国民的な帝国主義となっている。資本主義が海外進出を必要とされるのは、国内の不平等な分配に起因するものであり、帝国主義を克服するためには社会主義的な経済制度を確立することが必要だと説かれる。幸徳はこのような経済体制の問題についてマルクス主義を選択的に援用するが、本論文によれば階級闘争的な把握は控えめであり、そのかわりに私的所有から社会共有や協同化への道筋が探求されるのが幸徳の特徴である(『社会主義神髓』)。また幸徳にはドイツ歴史学派経済学やラッサールを経た進化論の影響が見られることが指摘される。幸徳はその後渡米し、またロシアのナロードニキの影響もあって、直接行動の考え方が強まったことが辿られる。

この章の後半では、幸徳とは対照的に「内に立憲主義、外に帝国主義」を主張した同時期の思想家、浮田和民が論じられる。浮田もまた社会問題に関心を有し、とくにフランス革命後の近代社会にみられる「社会上の無政府」に対抗する必要から、第一に秩序、第二に進歩が必要であるとする。浮田は社会問題の解決のために「倫理的帝国主義」を説き、かつての侵略的な帝国主義とは区別される、社会進化にもとづき国際法を遵守する、世界の文明化に合致した民族の「高尚なる生存競争」の必要を説く。浮田は「社会的天性」を進化の証として重視し、国家統一を目的として、アリストテレス『政治学』の *zoon politikon* 概念を援用した。また国際関係における日本の位置としては、「東洋の英国」を経て後にはアメリカをモデルとして東洋モンロー主義を説いて、帝国自衛と東洋平和を理由に、朝鮮と満州の帝国への併合の必要性を主張した。国内秩序に関して、浮田は立憲主義と一致するかぎりでの「社会主義」を擁護して自由競争を批判したが、浮田の社会主義は幸徳とは対照的に国家社会主義的性格が強く、直接行動や革命的社会主義、人民主権を破壊的であると断罪した。その後浮田はトライチュケの軍国主義に心酔し、国家主義的傾向を強めていくことになった。

第3章は大逆事件や大正政変を経た後の大正時代前半の、社会改革と対外政策をめぐる議論を扱う。まず浮田は、民衆の台頭を人民主権や破壊的な無政府主義として非難したが、これに対して吉野作造は「貴族的民衆政治」の立場から両義的な態度を取り、民衆を危惧すると同時に民衆を包摂した政治の可能性を構想した。本論文は吉野の当初の考え方が、浮田や海老名弾正の影響を受けており、「日本魂」の必要性や「七博士意見書」の対外強硬論に傾き、内と外とを連動させて「内に立憲主義、外に帝国主義」を主張したことを明らかにしている。また吉野は主権の問題と「国家威力」の問題とを区別し、前者が法的な事柄であるのに対して後者は内的規範を意味し、時代の推移とともにその担い手が多数者へと移行していることが指摘される。

第一次世界大戦とドイツの敗北の後、吉野は個人が道徳律に支配されると同様に、国家も国際関係の道徳律に支配され、「国際的正義公道」に従うべきことを主張するようになる。これは異民族の並立を覇権構築の課題に持ち込むものである。同時期、内政において吉野は、

「国家威力」の議論を発展させて民本主義を説くようになる。民本主義は天皇主権との対立を回避しつつ政治の運用においてデモクラシーを導入し、国家と個人、一般人民と少数特権階層との調和を説くものであった。「内に民本主義、外に東洋覇権」が吉野のこの時期の立場を集約する。吉野の民本主義に対して、大逆事件後幸徳の系譜を継承する大杉栄はこれを批判する。大杉は浮田の無政府社会主義断罪に対抗するかたちで、進化論の観点からアナーキズムを基礎づけようと試みる。大杉はマルクス主義的な階級闘争よりもそれに先立つ「征服の事実」(クロボトキンに由来)を重視し、征服が人間を征服者と被征服者とに分割し、今日に至るまで後者に奴隷根性を生み出したのであり、この奴隷状態に対する反逆に自由を見出す。大杉はニーチェ、ベルクソン、ソレルを用いて反逆としての生の創造を主張した。また大杉は征服によって歪められた自我の皮を取り除くこと(白紙主義)を求めた。大杉は浮田や吉野が個人と国家の関係という枠で考え両者の調和を説いたのに対して、吉野の民本主義を国家主義と批判し、それに替えて個人と社会の調和を求める社会的個人主義の立場を探求していった。社会主義者となる山川均もまた、大杉と同様に吉野の民本主義を批判したが、その視点は階級問題と帝国問題にあった。

第4章では第一次世界大戦の終結後、戦後不況や米騒動、さらには世界恐慌につながる経済的混乱、植民地での反帝国主義運動の出現などの事態の変化のなかで、吉野、大杉、山川の言動がどのように展開したかを論じる。まず吉野はウィルソンの十四か条を受けて国際的平等主義の実現としての国際連盟に期待をし、「内に民本主義、外に国際民主主義」の立場へと進む。そして国家間の関係は相互依存(interdependence)に求められ、東洋覇権に替わって永久世界平和が希求される。国内の社会問題については、経済的認識はより深まり、マルクスやラッサールの影響を受けた面も見られるが、吉野がとくに注目するのは資本主義における分配の不平等であり、アントン・メンガーを援用して生存権を基盤とした社会改革が主張される。他方でマルクス主義に対しては批判的距離が維持されており、生産手段の私的所有などの変革は暴力を伴うものとなり、その結果目的のためには手段を選ばないプロレタリアート独裁が生じるとしてこのような方向を否定する。吉野が変革に求めるのは物質的条件の改善以上に、労働者階級を含む文化創造などの内面的変革であった。マルクス主義には批判的であった吉野は、クロボトキンを介して、通常危険思想とみなされがちなアナーキズムについてはかなり好意的な解釈を行っていることを本論文は指摘する。それは「無政府的主権論」とされる考え方であり、吉野は無政府と無国家とを混同しないように注意を促している。吉野によれば現状では政府は必要でありその否定は認められないが、社会改造が進んだ将来においては、国家の最高主権のもとで政府は不要となる可能性を示唆している。この他、吉野は英国の多元的国家論にも関心を持つようになり、それまでの国家中心主義を相対化する方向を見せるようになった。

同じ時期の大杉は、米騒動や労働運動の台頭を背景として、議会政治的な活動は個人の生の拡張を妨げるとして反発し、ギルド社会主義を再解釈する仕方で、サンディカリズムに自主自治の新しい社会の創造を期待するようになる。それは労働者が一字一字、一行一行、自

ら白紙のうえに書き込んでいく実践であると説明され、ボルシェヴィズムのような前衛による上からの指導とは対極的な自由連合の試みであった。また、本論文ではブルードンに影響を受けた大杉の私的所有権批判についても考察が展開されている。

他方、マルクス主義とアナキズム(バクーニン、クロポトキン)の両方の系譜から影響を受けてきた山川は、マルクス主義への傾倒を深め、大杉らとのあいだにいわゆるアナ・ボル論争が展開される。山川によれば大杉のようにサンディカリズムのような「政治の否定」は政治的変革の時勢に応じることができず、改革を先延ばしにして政治的変革のみならず社会的変革の機会をも失わせてしまう。そして山川はその方向転換論によって、かつての「合同主義」からより前衛主義的な無産階級運動へと転換するが、本論文はそこに山川の「政治の否定」から「政治の対抗」への変化の意義を見出している。

最後に第5章の結論において、各章の主題が振り返られるとともに、とくに「社会的なもの」の発見を契機とした各論者における「政治」の位置の変化およびそれらの領土化/非領土化との対応関係が示されてこの論文が結ばれている。

本論文の意義は、明治末期から大正期までの日本の主要な社会思想家たちを、その社会問題への対応(政治の主題の変化)と帝国主義政策への賛否の関係を軸に比較するとともに、思想家相互の影響関係を明らかにして、大きなスケールでこの時代を描き切った点に求められる。その解釈方法は現代思想の影響を受けつつも正攻法であり、たとえば吉野の講義ノートなど最近の新資料を用いた解釈など、学界に対する重要な貢献となっていることも評価に値する。また論文の特徴として言えることは、国家と社会、個人の関係や、社会的なものとの政治の変容、内政と対外政策の連関など、政治理論や社会理論における興味深い諸論点を取り上げられ、それらが具体的な歴史を背景としてきわめて豊富な考察を引き出している点である。論文提出者は台湾の大学で現代政治理論を学んだ後、来日して近代日本政治思想研究に着手した。言語も専門領域も異なる東京大学での研究は、日本史の基礎知識や学術的な日本語の修得から始まり、多大な努力を要するものだったが、それが見事に結実したと評することができる。とりわけ政治理論的思考力と、外から近代日本を見る視点とが本論文に優れた個性を与えていると見ることができよう。

もっとも本論文にも不十分な点が存在することも否定できない。本論文で各思想家を比較するさいの重要な枠組となっている(非)領土化の概念は、その意味するものが広くまた多義的であるために、この概念をもって思想を特徴づけることにはかならずしも成功していない。この概念の由来するドゥルーズの概念との異同が明確ではないという問題もある。思想の比較のためにはより具体的で多元的な指標に分割することが望ましいと考えられる。

以上のような改善を要する点も見られるが、それは本論文の大きな価値を損なうものではない。それゆえ本審査委員会は本論文に博士(学術)の学位が授与されることがふさわしいと認める。